

串間市教育研究所

I	研究主題	1-4-1
II	主題設定の理由	1-4-1
III	研究の目標	1-4-1
IV	研究の仮説	1-4-1
V	研究の内容	1-4-2
VI	研究の実際	1-4-2
	1 研究の基本的な考え方	1-4-2
	2 kushima 版アクティブ・ラーニング	1-4-2
	(1) kushima 版アクティブ・ラーニングとは	1-4-3
	(2) 市内全ての学校での実践を目指して	1-4-5
	(3) 一貫教育学習指導方法研究部との連携	1-4-7
	3 学力アッププログラム	1-4-8
	(1) 学力とは	1-4-8
	(2) 「みやざき学習状況調査」の分析	1-4-8
	(3) 問題作成及び実施	1-4-9
	(4) 授業での共通実践事項の確認	1-4-9
VII	成果と課題	1-4-10
	○ 研究同人	

I 研究主題

主体的に学び、確かな学力を身につける児童生徒の育成
～kushima版アクティブ・ラーニングと学力アッププログラムの実践をととして～

II 主題設定の理由

串間市では第二次宮崎県教育振興計画を踏まえ、本市の恵まれた教育資源を活用しながら、本市の実態に即した「串間市ならではの教育」を推進している。特に学力向上の推進では

- 小中高一貫教育を基盤に、学校、家庭、地域社会が一体となった取組を推進します。
- 子どもたちの発達段階に応じた各種学力検査や知能検査を実施し、児童生徒の学習状況等の分析を行い、一人一人の児童生徒に確かな学力を身につけさせるための指導の充実を図ります。
- 児童生徒の基礎的・基本的な学習内容を確実に定着させるため、少人数授業の実施など、指導方法や指導体制の工夫改善等を通して、「わかる授業」で基礎学力の向上を図ります。
- 確かな学力を伸ばすため、家庭学習の推進を図ります。
- 児童生徒の学力向上に資するため、小学4年生から中学3年生を対象として「日本語検定」を、また中学1年生から中学3年生を対象として「英語検定」を全児童生徒へ実施します。

の施策を掲げている。

これらを踏まえ、本研究所では、「学力向上」に重点を置き、①「指導方法や指導体制の工夫改善」②「各種学力検査や知能検査を実施し、児童生徒の学習状況等の分析を行い、一人一人の児童生徒に確かな学力を身につけさせるための指導の充実」に着目し、平成27年度より研究を進めてきた。また、平成29年4月、串間市内の6中学校が統合して開校する串間中学校と、県立福島高等学校（同市）による連携型小中高一貫校の設置に伴い、小、中、高の一貫した基本授業スタイルの構築を目指し、取り組んできた。

①については昨年度、児童生徒が主体的に学び、自ら考え、自ら問題を解決していくことを通して、確かな学力を身につけさせるために *kushima* 版アクティブ・ラーニングの在り方を研究し、理論と方法について明確にすることができた。本年度はその理論と方法について、市内の学校で実践してもらい、理論の修正を加えると共に、市内のどの学校でも *kushima* 版アクティブ・ラーニングが実践されるようにした。②については児童生徒が学んだことを定着させていくという観点から、各種学力検査のうち、「みやざき学習状況調査」に着目し、昨年度の取組の反省を生かし、できるだけ早く対策に取り組み、数値的な学力のアップを目指していくことにした。

これらの取組を市全体で行うことで「主体的に学び、確かな学力を身につける児童生徒の育成」につながるのではないかと考え、本主題を設定した。

III 研究の目標

- 1 *kushima* 版アクティブ・ラーニングを市内すべての学校で実践し、どの学校でも児童生徒が学習問題や課題に対して、自らの手段で主体的に学び、自分の考えを基に、他者と協働的に学習していく授業が展開されるようにする。
- 2 学力アッププログラムを基にトレーニングを行い、串間市内の児童生徒の数値的な学力の向上を図る。

IV 研究の仮説

- 1 昨年度に作成した *kushima* 版アクティブ・ラーニングの理論と方法を基に、各学校で授業の実践をしていけば、どの学校でも児童生徒が学習問題や課題に対して、自らの手段で主体的に学び、自分の考えを基に、他者と協働的に学習していく授業が展開され、市内全ての児童生徒は主体的に学習に取り組み、確かな学力を身につけることができるであろう。
- 2 「学力アッププログラム」に沿って、トレーニングを行えば、数値的な学力の向上が図られるであろう。

V 研究の内容

- 1 研究の基本的な考え方
- 2 *kushima* 版アクティブ・ラーニング
 - (1) *kushima* 版アクティブ・ラーニングとは
 - (2) 市内すべての学校での実践を目指して
 - (3) 一貫教育学習指導方法研究部との連携
- 3 学力アッププログラム
 - (1) 学力とは
 - (2) 「みやざき学習状況調査」の分析
 - (3) 問題作成及び実施
 - (4) 授業での共通実践事項の確認



【 研究構想 】

VI 研究の実際

- 1 研究の基本的な考え方

本研究所は平成27年度より、「学力向上」をめざし、2つの観点から研究を進めてきている。まず、アクティブ・ラーニングについて研究を進め、*kushima* 版アクティブ・ラーニングの理論を整理し、一単位時間のモデル（授業スタイルC）を作成した。

本市では、「アクティブ・ラーニング」を次のように定義付けた。

kushima 版アクティブ・ラーニングの定義

児童生徒が学習問題や課題に対して、自らの手段で主体的に学び、自分の考えを基に、他者と協働的に学習していくこと

しかし、*kushima* 版アクティブ・ラーニングは、単に児童生徒が主体的に協働的に学習できる場面を多く取り入れるのではなく、児童生徒を学習者として育成することも研究内容に加えている。「ラーニングスキル」を明確にし、児童生徒に身につけさせることで、主体的な学びや協働的な学習を成立させる学習形態になっている。

kushima 版アクティブ・ラーニングで実践を積み重ねていくと児童生徒の思考・判断・表現する場はこれまでの学習形態に比べ、段違いに多くなり、ラーニングスキルの上になり立つ集団解決では Input、Output を繰り返すため、児童生徒の思考力・判断力・表現力の向上を実感することができた。また、全国学力学習状況調査等のいわゆる B 問題への対応力も付いてきているという市内の学校の報告もある。しかし、思考力・判断力・表現力の向上を評価する方法がまだ十分確立されているとは言えず、「知識・技能」を図る評価方法が多いため、指導者の感覚的なものでしかない。

「アクティブ・ラーニング」で学習を行えば、一方向的な指導者の説明や解説を聞くよりも、知識理解は進み、記憶に残ると一般的には言われているが、現在の「知識・技能」を重視した評価では、その成果がすぐに表れるとは考えにくい。それは「アクティブ・ラーニング」で培う学力が今の評価方法では十分図られないと考えるからである。高大接続システム改革会議「最終報告」では今後の「知識・技能」のみならず「思考力・判断力・表現力」を評価する方法がイメージとして掲載されている。具体的に例示されている問題を見ると、これまでの問題形式とは大きく異なり全国学習状況調査で行われている B 問題を、より「思考力・判断力・表現力」を重視して作成されているように見える。この改革により、当然その他の評価方法も改善されていき、今後は「知識・技能」を基盤とした「思考力・判断力・表現力」を評価する方法へ変わっていくことが予想される。そうなれば、「アクティブ・ラーニング」で培う学力と評価が一致し、より「アクティブ・ラーニング」の必要性が高まってくることが考えられる。

しかし、本研究所では本市の課題である「知識・技能」を重視した学力向上にも取り組んでいる。そこで、授業改善としての *kushima* 版アクティブ・ラーニング と トレーニングを主

kushima版アクティブ・ラーニングー単位時間のモデル（授業スタイルC）

段階	学習活動	教師の動き及び留意事項
問題提示	1 本時のめあてを確認する。 	※ 指導者はこれまで身につけさせたラーニングスキルを各段階で発揮させる学習の場として捉える。 ○ スキル①を使ってめあてや問題を書かせる。 本時のめあてを指導者と同じスピードでノートに書かせる。 ○ スキル②を使ってめあてや問題を読ませる。 文章を読ませる場合は声の大きさやスピードに気をつけさせる。※ 教師が指示するのではなく、これまでの指導で児童生徒には理解させておく。
	2 一人調べを行う。  	○ スキル③を使って一人調べをさせる。 一人調べの時間を設定し、これまで指導してきた一人調べのスキルを使って、学習問題やめあてに沿って、考えさせていく。 一人調べを進めていく上で、自分が疑問に思ったところ、わからないところ、学習問題としてふさわしいところ等を明らかにしておき、この後の話合いにどのように参加するかを考えさせる。 ○ 机間指導 つまずきを修正するのではなく、自分の考えをその後の話合いで発言できるように助言する。誰がどのように理解し、どのような考えをもっているのか把握し、この後の集団思考がどのような話合いになるかを数パターン予想しておく。話合いで学び合うため、ヒントカードを使ったり、時間を延長したりしない。 ○ グループやペアでの話合い 少人数で考えを交流し、自信をもたせたり、話合いの段階的指導を行ったりする場合は有効である。しかし、教師の目が届かなくなり、把握が難しくなるため、グループやペアで話し合い、代表者に発表させるような活動を行う際のデメリットを理解して設定する。※ 全員の理解を把握した上で、有効な話合いが行われた場合はいいが、教師の目が届いていないことが多く、代表者の考えに流され、理解できていない児童生徒を把握できなくなる危険性がある。 ○ スキル④を使って話合いを行わせる。 内容を理解している児童生徒が発表する場ではない。疑問をもっている児童生徒、理解が十分でない児童生徒がわからないことを解決する場である。疑問に思うことやわからないことを解決するために協働し合って解決していく。
個人思考	3 話合いを行う。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 話合いのスタイルとして、発表からの質問、ディベート、ジグソー法、対立型の討論、KJ法、パネルディスカッションなど、様々な方法が考えられ、場合や段階に応じて、経験として設定してよいが、教師の指示によって計画された話合いであるため、最終的には児童生徒主体の話合いを目指していく。 </div>
	4 話合いをまとめる。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 話合いのモデル a 疑問をもっている児童生徒、十分な理解ができず、わからないことがある児童生徒の発言「～に疑問をもちました。」「～がわかりません。」から話合いを始める。 b 同じ疑問や同じところがつまづいている児童生徒は発言する。 「私も同じで～が疑問です。」「僕も同じで～がわかりません。」 ※ 「同じです。」で終わらせず、自分の言葉で言わせる。 c 疑問やわからないところを解決するための話合いを行う。 「それは～ではないか。」 d 疑問やわからないと発言した児童生徒に再度発言させる。 「〇〇さんの考えを聞いて～と思いました。」「～なことがわかりました。」 ※ 最初に発言した児童生徒が理解したことを自分の言葉で説明できれば、別の話題に移ってもよい。 </div> ※ a～dを1クールとして考え、話合いができるようにしておき、教師が本時で指導したいことや内容と照らし合わせながら、話合いを見守る。場合によっては机間指導中に把握していた児童生徒の考えを使って、話合いの修正を行う。 ① スキルが十分身につけていない場合は随時指導していく。 ② 期間指導中に把握した児童生徒の考えを使って、活性化したり修正したりする。（指名してもよい。） ③ あくまでも協働解決を目指す場合は、発言を待つ。
集団思考 集団解決	5 個人でまとめる。	○ スキル⑤を使ってまとめる。 解決したことを再度、個へ戻す。自分の言葉で書けるようにする。 話合いで深めたことを生かして書くことが、どのように書くことなのかを理解させておく。
	6 習熟を図る。	
	7 学習したことの評価を行う。	○ 本時の学習内容に合った練習問題等を行い、学習の理解を評価する。
個人解決 定着及び評価		

(2) 市内すべての学校での実践を目指して

【 教育研究所 授業公開ポスター 】

7月1日～11月8日
串間中学校 一貫教育スタートまで
あと243日

**集中講座
授業公開
します！**

小学校 中学校 高等学校

Kushima版アクティブ・ラーニング
基本理念が学習困難や課題に対して、自らの手段で主体的に学び、自分の考えを基に、他者と協働的に学習していきます。

どの授業でも参観できます

有明小学校4年 国語科 7月1日(金) 日高 太志 教諭	本城小学校6年 国語科 7月15日(金) 平川 滋也教頭
都井小学校 5・6年 算数科 9月27日(火) 岡部 啓徳教諭	北方小学校4年 社会科 10月6日(木) 平屋 智徳教諭
福島中学校3年 英語科 11月4日(金) 日高 真 教諭	福島小学校3年 算数科 11月8日(火) 窪谷 直弓教諭
福島高等学校 年 科 調整中	

串間市教育研究所
お申込みは随時、別紙にて案内しますので、本城小学校までFAXでお申し込みください。
FAX75-1713

Kushima版アクティブ・ラーニング

有明小学校4年 国語科
7月1日(金) 日高 太志 教諭

4年物語文教材「走れ!」の授業。心情の変化を考えさせ、対立型の話し合いを行います。学年がスタートして3ヶ月、ラーニングスキルも徐々に身につけてきました。学んだことが身に付いているか、評価を授業内に取り入れているのも新しい取組で、必見です。

本城小学校6年 国語科
7月15日(金) 平川 滋也教頭

飛び込みでの授業。アクティブ・ラーニングを成立させるために1から指導します。子どもたちが主体的に協働的に学習できるようにするために、どのようにラーニングスキルを身につけていくのかを公開します。

都井小学校 5・6年 算数科
9月27日(火) 岡部 啓徳教諭

アクティブ・ラーニングが最も力を発揮する様式指導です。それぞれの学年がそれぞれの内容を主体的に学習していきます。少人数でのアクティブ・ラーニングはどのような授業でしょうか。少ない人数での協働的な学習とは……。

北方小学校4年 社会科
10月6日(木) 平屋 智徳教諭

昨年度に続き、2回目の社会科アクティブ・ラーニングの授業を公開します。様々な資料や調査したものを基に、子どもたちが主体的に問題を解決する姿が見られます。教科の特性を生かした真の問題解決的な学習が展開されます。

福島中学校3年 英語科
11月4日(金) 日高 真 教諭

中学校でのアクティブ・ラーニングです。Kushima版アクティブ・ラーニングの基本形を中学校現場で授業したらこうなります。英語の授業だから……ではなく、教科の特性を踏まえて、どのように授業していくのか、他教科の先生方も、どうぞご覧ください。

福島小学校3年 算数科
11月8日(火) 窪谷 直弓教諭

市内で一番大きい学校での授業です。時期も11月でラーニングスキルも徐々に高まり、子どもたちの人数も多いので迫力ある算数の授業が展開されます。3年生の子どもたちの元気な姿が見られると思います。

昨年度作成した *kushima* 版アクティブ・ラーニングの理論と方法を串間市全体に浸透させるために今年度は6回の授業公開を行った。参加人数はのべ157人、串間市全教職員数の77%が公開に参加した。串間市内の多くの教員が *kushima* 版アクティブ・ラーニングの実際に触れ、研究協議を重ねることで理論と方法について理解を深めることができ、各校での授業実践に生かした。また、授業公開では学年、教科において幅広く授業実践を行い、理論

の検証を重ねた。それにより児童・生徒の発達段階や実態を考慮したラーニングスキルの明確化、学び合いの形態、教科の特性を生かした児童の主体的活動の在り方などについて昨年度以上に実践に基づいた検証を、具体的かつ数多く行うことができた。

【 10月6日 北方小学校 4年 社会科 平屋教諭 の授業公開の実際 】

- 本時の目標
火災現場で早く安全に消火や救助をするために、様々な役割の人々が協力していることを理解する。 【社会的事象についての知識・理解】
- *kushima* 版アクティブ・ラーニング授業スタイルの位置付け (本時段階)
授業スタイルBからCへの移行期
- 授業の概要
展開の段階において、消防署以外の関係機関が火事の現場においてどのように対応しているかその理由を協働的に考えさせた。その際、現場写真、現場の情報文、現場地図といった3種類の非連続型の資料を基に、比較・関連・総合して考え、表現させる学習活動を設定した。話し合いの仕方について、方法、活動内容、検証の仕方、時間を確認した後、話し合いだけでなく板書も児童中心に進めさせ児童主体の活動へと導いた。話し合い活動中は、教師がファシリテーターとして話し合いの進行を補助しながら全員が主体的に活動に関われるように、配慮を要する児童には机間指導の中で個別に声かけしていった。児童の主体的活動を本時の目標に収束させるために、教師が準備した資料を基に話し合った内容の検証を行った。まとめは児童のこぼし話を生かして行うことで、協働的に問題解決したという成就感を児童に味わわせた。
- ALで有効に働いたラーニングスキル
ラーニングスキル④ 集団で協働的に解決するスキル
 - ・ 自分たちで解決していこうとする。(態度)
 - ・ 理解できないことや疑問に思うことを発言するための話型
 - ・ 出された疑問について自分の考えを発言するための話型
 - ・ 解決に向けて他の意見を比較したり、付け加えたりするための話型
 - ・ 板書を活用し、集団での思考を整理するための話型
 - ・ 解決に向けてみんなの考えを基に、まとめるための書く活動



【11月4日 福島中学校 3年 英語科 日高教諭 の授業公開の実際】

- 本時の目標
 - 関係代名詞(that)を使用した言語活動に積極的に取り組もうとする。 【コミュニケーションに対する関心・意欲・態度】
 - 関係代名詞【who / which / that】の違いを理解することができる。 【言語に関する知識・理解】
- *kushima* 版アクティブ・ラーニング授業スタイルの位置付け（本時段階）
授業スタイルB
- 授業の概要

学習する文法の説明をせずにペア活動や作文活動に取り組み、活動の中で生徒が文法の意味や用法に気付けるようにしたいと考えた。導入の段階で、毎回の授業で練習する Basic Dialog の関係代名詞 that にはどんな意味があるのかを投げかけ、ペアによる暗誦活動の中でターゲットとなる "I know a shop that sells nice greeting cards." の意味を前後の英文から類推させた。展開の段階においては、関係代名詞 that を使ってクイズ作りに取り組み、グループや集団の中で聞き合い、that がどう使われているかに気付かせたいと考えた。終末段階において、グループごとに本時の文法についてまとめさせ、協働的な学びを通して文法を学習した。それぞれの活動の中で、文法の説明を介さずに前後の意味等から判断して表現する様子や、文法の意味や用法について、迷ったり、間違ったりしながらも修正を加え、協働的に探っていく様子が見られた。
- ALで有効に働いたラーニングスキル
 - ラーニングスキル② 学習に適した声、文章（英語）を読むスピード
 - ラーニングスキル④ 集団で協働的に解決する話型
 - ・ 自分たちで解決していこうとする。（態度）



【9月27日 都井小学校 5・6年 算数科 図師教諭 の授業公開の実際】

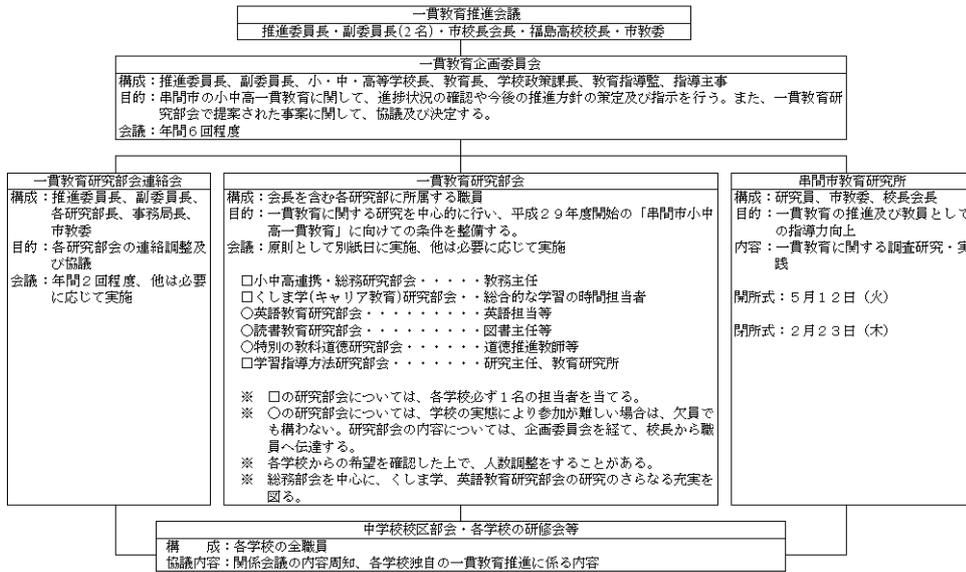
- 本時の目標
 - 5年 異分母分数同士のたし算の意味を理解し、計算できる。 【技能】
 - 6年 道のりと速さを知って、時間を求めることができる。 【技能】
- *kushima* 版アクティブ・ラーニング授業スタイルの位置付け（本時段階）
授業スタイルC
- 授業の概要

本校は複式学級を有する学校であり、算数科の学習では児童が自主的・主体的に進めるガイド学習を行っている。ガイド学習の手引きをベースに、児童自らの力で見通しからまとめまでのすべてを進めている。これまでの学習では見通しや話し合い、まとめの目的や方法などについての指導を折に触れて行い、それを積み重ねることによって自らの力で問題解決をすることができるようにした。本時は、見通しの段階からすべてガイドの進行のもと、これまでの学習と違うところや見えそうな既習事項は何かを話し合い、めあてを立て、答えの見当を立てた。一人調べの段階では、児童は具体物や図などを使って、自分なりに考えを深めていった。児童がどう考えたかを引き出す声掛けを行い、正答・誤答に関わらず、自分の考えを明確にさせた。話し合いでは、問題解決が困難だった児童から発表し、他の考えと似ているところ、ちがうところ、よさなどを話し合いながら、最後は自分たちの言葉でまとめた。そこまでの過程を尊重しながら評価することで問題解決をしたことへの達成感を味わせた。
- ALで有効に働いたラーニングスキル
 - ラーニングスキル① 授業を円滑に進めるための筆写速度
 - ラーニングスキル③ 学習問題、めあてに沿って個人で調べる書く活動
 - 図式化、絵画化、図表化、具体物
 - ラーニングスキル④ 協働的に解決する話型
 - ラーニングスキル⑤ 解決したことを自分の言葉でまとめることができる書く活動



(3) 一貫教育学習指導方法研究部との連携

平成28年度 串間市小中高一貫教育推進に係る組織図



串間市では、平成29年度開始の「串間市小中高一貫教育」に向けての条件を整備するために一貫教育に関する研究を行う一貫教育研究部会がある。一貫教育研究部会は6つの部会から構成されており、その中に学習指導方法研究部がある。学習指導方法研究部は市内の研究主任で構成されており、本

研究所の理論を基に、各学校で実践をするために連携しながら、*kushima*版アクティブ・ラーニングに取り組んでいる。

学習指導方法研究部では、各学校の取組を共有したり、取組を紹介するAL通信の発行をしたりしている。研究授業も独自で行っており、本研究所で「アクティブ・ラーニングを成立させるための指導」を公開した本城小学校6年で、3ヶ月後に研究授業を行っている。研究所の授業公開でのスキル指導をきっかけに、学級担任が指導を継続的に行ったことで、スキルの身についた児童が主体的に協働的に、学習する姿を見ることができた。

【 AL通信 】

newsletter

3 AL(アクティブ・ラーニング)通信

平成28年7月26日 串間市一貫教育学習指導方法研究部

本城中学校のkushima版アクティブ・ラーニング

本城中では

「基礎的・基本的な知識・技能を習得し、意欲的に活用する児童生徒の育成」
～言語活動を充実させるための学習指導法の工夫・改善を通して～

を研究主題とした研究の最終年度ということもあり、今まで行ってきた研究の中で、「言語活動の充実を図ることがアクティブ・ラーニングの基礎につながると考え、取組を行っていき予定である。

具体的な目指す生徒像を挙げると、
H27年度: 自分の思いや考えを相手意識をもって伝えることができる生徒
H28年度: 互いの思いや考えを合うことで、考えを広げたり深めたりすることができる生徒となり、これらの生徒像を実現するために、継続研究の改善を行っていく。

【数学の研究授業の様子】
自分の考えをワークシートを使って説明している場面

授業改善班
①研究授業の全員実施(互いに2回以上、研究授業を参観する)
②研究授業時の評価シートの活用(参観者記入用)
今年度の研究授業では、今までの評価シートの形式に加え、生徒が見通しをもつことができるような「手立て」を提案者が評価シートに明記しておき、その手立てに対するコメントを参観者が文章評価するようになっている。

学習環境班

①1分間スピーチの実施(各学年の実態に応じた内容と取組を行う。以下は昨年度の例)
1年: 作文の書き方を習得し、その後、1分間スピーチを行った。
2年: 本城小と合同で取り組んだスピーチテーマの中から、自分で1つ取り上げ、毎日1人ずつ順番にリレーしてスピーチを行った。クラス内で発表後、2人指名して感想や質問をさせた。
3年: 2学期は、新聞の記事を使い、100字以内の内容を要約し、200字で自分の意見(賛成・反対・提案など)を書き、発表した。発表後は代表1人がコメントし、1人がスピーチ原稿のコメント欄に意見を寄せ、教室後方に掲示した。3学期は、入試に向けて全員が1つのテーマについて300字書き、輪番で代表1人が原稿を見ずに発表し、数人が感想を発表した。その後、それぞれが書いてきたスピーチ原稿を全員で回し、1分間で読む→1分間で感想を書く(本人に返す)→30秒間感想を読むを毎日行った。

②朝学習(ひががイム)の実施(毎週火曜日)
昨年度までは教師が生徒の基礎学力向上のために補助的に入っていたが、本年度は生徒間での教え合い学習や話し合いの活性化を図るために以下のように実施している。

時間帯	生徒の活動	教師の動き	
		数学	英語
8:00~8:05	問題を解く(個人思考)	見守る	見守る
8:05~8:10	生徒同士で教え合い学習をする	話し合いを促す	理解できていない生徒へ補助に入る
8:10~8:15	解答・解説を聞く 交流	理解できていない生徒へ支援に入る	交流に参加する

newsletter

福島小学校のkushima版アクティブ・ラーニング

平成27年度の取組

昨年度までの取組
福島小学校では、平成26年度から2年間、キャリア教育の視点に立った算数科指導の工夫について研究を進めてきた。その中で、問題提示の工夫、自分の考えを持たせるための工夫等により、児童の学習意欲の向上や自ら考える力の育成を図ってきた。

平成28年度の取組

平成28年度の取組
今年度は、昨年度までの実践を継続しつつ、アクティブ・ラーニングの考え方を取り入れた算数科指導を工夫改善し、児童の学習意欲や考える力をさらに高めたいと考えている。本校では、アクティブ・ラーニングを全面に打ち出した研究はまだ始まったばかりである。今後、以下の研究班で具体的な研究内容を深めていく予定である。

授業研究班 **基礎学力定着班**

提案授業【6年2組 算数科「場合をあげて調べて」】

7月4日(月)に、昨年度、市教育研究所でkushima版アクティブ・ラーニングの研究をしてきた成松教諭による提案授業が行われた。

授業の中では、筆字速度を身に付けた児童の姿や、友達と一緒に考えたり、考えたことを伝え合ったりする児童の姿が見られた。
授業研究会では、「児童の学ぶ意欲を高め、主体的・協働的な学びを成立させるための指導の在り方はどうあればよいか。」という研究協議のもと、「学ぶ意欲を高め、自分の考えをもたせるための手立ての在り方」や「各段階における協働的な学び合い(話し合い)の在り方」について全教員で協議した。
今後、全教員がアクティブ・ラーニングの考え方を取り入れた算数科の検証授業を行っていくこととしている。また、11月8日(火)には、本年度の市教育研究所所属の窪谷教諭による研究授業を予定している。

3 学力アッププログラム

(1) 学力とは

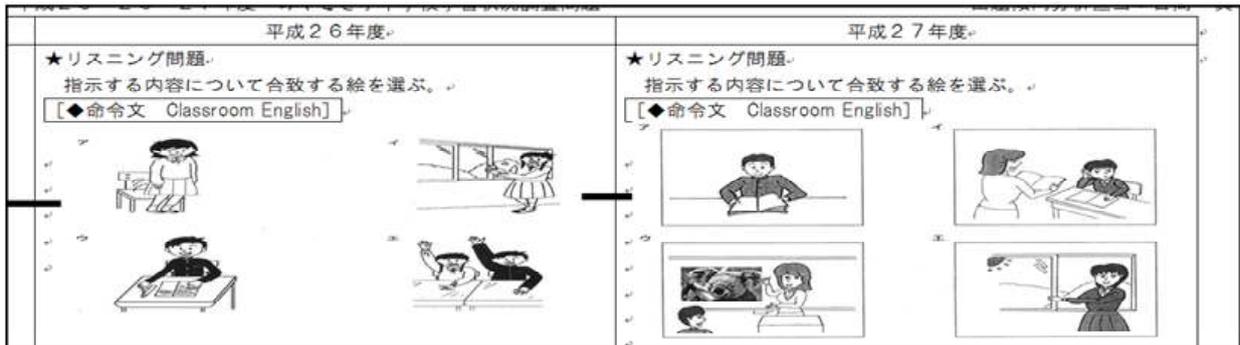
学校教育法第30条の第2項では「前項の場合においては、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して問題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。」とある。さらに、文部科学省は、確かな学力とは「知識や技能はもちろんのこと、これに加えて、学ぶ意欲や自分で課題を見つけ、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題解決する資質や能力等まで含めたもの」と述べている。

これを受けて、前年度から串間市教育研究所では、①基礎的・基本的な知識・技能の習得②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等③学習意欲を身につけさせなければならない学力と考えてきた。

(2) 「みやざき学習状況調査」の分析

学力アッププログラムでは、串間市の現状とプログラム実施後の効果を分析することができるよう、9月に宮崎県が実施している「みやざき学習状況調査」を活用することにした。「みやざき学習状況調査」を分析し、それを基に作成した類似問題に、市を挙げて全小学校5年生、中学校2年生が取り組んだ。

昨年度分析した小学校国語・算数、中学校数学に加え、今年度は中学校英語の出題傾向を分析した。これにより、宮崎県がどのような力を求めているのかということや、通年の問題の傾向を読み取ることができた。分析は、以下のような形で行った。



平成26年度		平成27年度	
★理解 リスニング	★理解 リスニング	★理解 リスニング	★理解 リスニング
◆命令文 [Classroom English]	◆命令文 [Classroom English]	◆命令文 [Classroom English]	◆命令文 [Classroom English]
★理解 リスニング	★理解 リスニング	★理解 リスニング	★理解 リスニング
◆Who 過去形? (人) do / does / did	◆疑問詞 [What~?] の疑問文	◆現在進行形 be 動詞+ing	◆過去形一般動詞の疑問文 Did~?
◆疑問詞 [What~?] の疑問文	◆未来形 be going to (動詞の原形)	◆疑問詞 [Where~?] の疑問文	◆疑問詞 [Where~?] の疑問文
◆未来形 will (動詞の原形)	★理解 リスニング	★理解 リスニング	★理解 リスニング
★理解 リスニング			

【中学校英語の分析】

「A数と計算」 ※ 過去出題回数 (5回…赤、4回…青、3回…緑、2回…黄)

実施年度	H 2 2	H 2 3	H 2 4	H 2 5	H 2 6
出題内容	A小数の加法の計算	A小数の加法の計算	A小数の加法の計算	A小数の減法の計算	A小数の減法の計算
	A小数の減法の計算	A小数の減法の計算	A小数の減法の計算	A3位数÷2位数の計算	A小数×小数
	A2位数×2位数の計算	A2位数×2位数の計算	A2位数×2位数の計算	A小数×整数	A整数÷小数
	A3位数÷2位数の計算	A3位数÷2位数の計算	A3位数÷1位数の計算	A四捨五入による概数の表し方	A分数の和の計算
	A十進位取り記数法の意味	A分数の意味	A大きな数の大小関係	A分数の意味	A計算の順序

【小学校算数の分析】

VII 成果と課題

1 *kushima* 版アクティブ・ラーニング

【成果】

- 学習者として身につけておかなければならないラーニングスキルを明確にし、児童生徒身につけさせることで、主体的に学び、自分の考えを基に、他者と協働的に学習していく業を行うことができた。
- 年間6回の授業公開を行うことで、参加していただいた市内の先生方とこれから串間市子どもたちに必要な学力やそれを身につけさせるための授業方法について、深く話し合うことができ、市全体で共通理解を図りながら研究を進めることができた。
- 市内すべての小中学校でアクティブ・ラーニングを意識した研究をしていただいたこと一貫教育研究部会学習指導方法研究部と連携して研究を進めたことで、すべての小中学校工夫した取組がなされ、その取組を共有することができた。

【課題】

- 来年度より中学校が1校に統合され、すべての小学校から串間中学校に入学することも頭に置き、すべての学校で学習者主体の授業がなされ、児童生徒がより充実した学習ができるようになるように、今後も市内の教職員が一丸となって具体的な授業方法について研究をめていく必要がある。
- 授業者としての手ごたえだけでなく、*kushima* 版アクティブ・ラーニングによって児童生徒にどのような力が身につけてきたのか、客観的に評価できる方法を検討していく必要がある。

2 学力アッププログラム

【成果】

- 「みやぎき学力学習状況調査」に絞り、*kushima* 版アクティブ・ラーニングによる授業善と学力アッププログラムによるトレーニングを組み合わせて実践したことで、小学校国語科、算数科に数値的な学力アップが見られた。
- 串間市内全ての小学校5年生の担任、中学校の英語科担当に集ってもらい、「みやぎき学力学習状況調査」対策を検討すると共に、対策に向けた授業での取組等について話し合ことで指導者の意識が向上した。

【課題】

- 夏季休業中の取組が大きく影響するため、家庭との連携、協力が必要不可欠である。今後家庭への呼びかけや家庭学習のシステムの構築を行っていく必要がある。
- 小学校国語科、算数科の数値のアップのみにとどまったことや同一児童の経年比較ではなく、県平均を基準にここ数年の串間市の「みやぎき学習状況調査」の結果と比較したこと等取組や成果の検証方法について今後も検討する必要がある。

【研究同人】

所長	土肥 昭彦	(串間市教育長)			
事務局	野邊 幸治	(学校政策課長)	永井 敬雄	(教育指導監)	
指導員	津奈木 考嗣	(指導主事)			
研究員	平川 滋也	(本城小学校教頭)	日高 太志	(有明小学校教諭)	
	平屋 智徳	(北方小学校教諭)	函師 啓悟	(都井小学校教諭)	
	瀬戸山 なつ代	(大東小学校教諭)	窪谷 藍弓	(福島小学校教諭)	
	日高 真	(福島中学校教諭)	野邊 智亮	(大東中学校教諭)	
	柳田 まゆ	(福島中学校教諭)			